産経新聞

平成21年12月9日(水) 朝刊 23面

情報防衛は人の意識から

河野和宏氏＝大学院博士課程

（ネットセキュリティ）

こうの・かずひろ　昭和56年生まれ。大阪大大学院工学研究科電気電子情報工学専攻修士課程修了。現在、同大学院工学研究科電気電子情報工学専攻博士課程在学。専門はネットセキュリティ（アクセス制御、匿名通信）。国際会議ＩＡＳ09においてBest Paper Awardを受賞。来年４月、社会安全学部助教に就任予定。

パソコン・ブロードバンド環境の一般社会への普及による一般生活の利便性の向上にともない、「情報」（個人情報や企業の秘密情報など）にかかわるセキュリティーの確保が大きな課題になってきている。安全安心に情報を取り扱う技術の開発、向上が社会的に強く求められている。

安全安心に情報を扱うための技術の総称を、「情報セキュリティー技術」という。

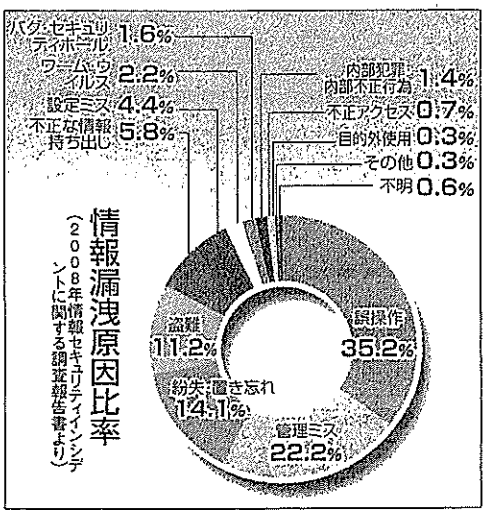
情報セキュリティーというと、最新の高度な技術を連想するかもしれないが、最も重要なのは〝人〟という要素である。

高度な技術を開発、導入しても、その技術を使う人がそれを適切に用いなければ、ほとんど意味をなさないからである。

近年では企業からの個人情報漏洩（ろうえい）が問題となっているが、これらのほとんどはヒューマンエラーに起因している。

「2008年情報セキュリティインシデントに関する調査報告書」でも、図のとおり誤操作（35.2％）、管理ミス（22.2％）、紛失・置き忘れ（14.1％）、盗難（11.2％）などの項目がセキュリティーインシデント要因の上位に挙げられており、ウイルスや不正アクセスなどは数パーセントでしかない。

これは、ウイルスや不正アクセスに対する意識は高いが、ヒューマンエラーに関してはあまり意識が向けられていないということの一つの例証であろう。



最近では、人の心理的、行動的側面に着目して情報を引き出す「ソーシャル・エンジニアリング」による被害も多くなっている。

例えば、パスワードを入力するところを後ろから盗み見する、廃棄された書類から情報を取り出すといったような事例である。

また、〝振り込め詐欺〟と同様に、他人になりすまして電話をかけ、情報を引き出すといったようなことも起こっている。

新しい技術の開発は必要だが、高いセキュリティー意識を持つことも必要であり、情報セキュリティーに関する知識・意識を向上させる教育が強く求められている。

安全安心を求めて

関西大社会安全学部の試み